

## 第3講座 高学年を含めた学童保育の生活づくり

講師：丸山 大祐（鷹栖町 児童クラブタンタラモッチ 指導員）

---

### ◎はじめに

私は鷹栖町の児童クラブに勤めて28年目となります。長くこの仕事をしていますが、高学年への苦手意識はずっとあり、今でも葛藤の毎日です。高学年との関わり方、活動や生活づくりで大切なことを、みなさんと一緒に考え、学びあいましょう。

- ・2015年 児童福祉法改定により対象児童が「おおむね10歳未満」から「小学校に就学している児童」（児童福祉法第6条の3）となる。
- ・2023年度の学年別の入所児童数と割合（全国学童保育連絡協議会・2023年調査より）  
低学年（1・2・3年生）が約8割 高学年（4・5・6年生）が約2割

### ◎高学年の『苦手・不安』を感じることは？みなさんと考えましょう。

ちなみに、私は

- ・「○○やるよ」と言っても「どうして」「やりたくない」「じゃあ休む」となる
- ・少年団や習い事などで忙しく、気持ちがここになような気がする
- ・高学年でかたまり、そこだけの空気で盛り上がり、他を寄せ付けない
- ・保護者との関わり方（高学年活動への理解等）
- ・思春期の女子（異性）への対応
- ・高学年にとって、有意義な時間をつくってあげられているのか
- ・低学年に手がかかり、高学年が後回しになってしまう

### ◎高学年の子ども側からすると…

- ・長い授業時間を終えて学童に帰ってきたら、低学年がたくさんいる
- ・スペース、遊び道具やマンガを先に帰った低学年が独占している
- ・支援員が低学年の対応でゆとりがなく、自分たちのことを見てくれない
- ・支援員から「低学年に優しくしてね」「高学年でしょ」と言われる
- ・周りの高学年が辞めていく
- ・学童に行っても遊び相手がいない
- ・親は行けというが、仕方なく来ている
- ・宿題が多く、少年団等の活動もあり、放課後の時間にゆとりがない

### ◎高学年の発達

- ・おおむね9歳～10歳

論理的な思考や抽象的な言語を用いた思考が始まる。道徳的な判断も、結果だけに注目するのではなく、動機を考慮し始める。また、お金の役割等の社会の仕組みについても理解し始める。

遊びに必要な身体的技能がより高まる。同年代の集団や仲間を好み、大人に頼らずに活動しようとする。他者の視線や評価に一層敏感になる。言語や思考、人格等の子どもの発達諸領域における質的变化として表れる「9, 10歳の節」と呼ばれる大きな変化を伴っており、特有の内面的な葛藤がもたらされる。この時期の自己の多様な可能性を確信することは、発達上重要なことである。

・おおむね11歳～12歳

学校内外の生活を通じて、様々な知識が広がっていく。また、自らの得意不得意を知るようになる。日常生活に必要な様々な概念を理解し、ある程度、計画性のある生活を営めるようになる。大人から一層自立的になり、少人数の仲間で「秘密の世界」を共有する。友情が芽生え、個人的な関係を大切にするようになる。身体面において第二次性徴が見られ、思春期・青年期の発達の特徴が芽生える。しかし、性的発達には個人差が大きく、身体的発育に心理的発達が伴わない場合もある。

(放課後児童クラブ運営指針解説書より)

◎『苦手・不安』について考えてみましょう

- ・高学年との関わり方…過度に口出ししないが、的確に助言・援助してくれる大人
- ・楽しくない、来たくない…その子にとって「一番最適な放課後はなにか」がポイント
- ・保護者の協力

◎目指すべき高学年保育とは？

- ・高学年が行きたい場所であるために
  - 高学年の力を発揮できる活動内容
  - 忙しい高学年がホッとできる場
  - 高学年同士が仲間と過ごす時間
- ・高学年は低学年の成長のモデルとなる
- ・豊かな放課後、豊かな学童期を過ごす

◎高学年とこんな活動、行事をしています

- ・お泊り会活動（高学年お泊り会、各モッチのお泊り会、夏休み・冬休みのお泊り会）
- ・学年行事（高学年はお泊り会）（6年生の活動）
- ・新入生歓迎会、卒業おめでとう会の司会進行
- ・いろいろな行事、遊びのリーダー

◎おわりに

「一人一人にとって一番いいことを大切にする」…その子が最適に過ごせる生活が何よりも大切

高学年は通過点に過ぎません。中学生・高校生・大人とつながっていく子どもたちの成長過程の中で、学童保育での生活が、一つでも何かのきっかけになっているのなら、それだけで意味があると思っています。